
吉原指南・

よしゆきうめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉原指南・

【Zコード】

Z3563Z

【作者名】

よしゆきつめ

【あらすじ】

安政五年、江戸・亀井町の裏長屋に住む武士で、真面目な清次郎とその向かいに住む棒手振りの喜市は、生靈に取り付かれたり化け狸が居候したり、奇妙な厄介ごとに絡まるのがしばしば。

そんな二人のもとにやってきたのは今度は武家の少年だった。彼は突然棒手振りの喜市への弟子入りを志願して・・・

安政五年、江戸は傳馬町の牢獄からさして遠くない亀井町の長屋でもつい先日「口ori」が俄かにはやつた。

流行つたと言つても小さな裏長屋でほんの一人ばかりが罹患しただけなのだが、それがなんとも奇妙な具合にろくな手当もなく直ぐに治つてしまつたので、持ち主が医者だという話題が皮肉にも手伝い、長屋は最近、碁石無用と御医師無用とをかけて将棋長屋と呼ばれていた。

当の「口ori」にかかつたうちの一人は棒手振りの喜市という若い男だった。

この男はとかく最近妙な事件に巻き込まれることが多く、現に喜市の部屋には妙な縁で運ばれた、見かけは十ばかりの子供であるが、化け狸の侘助が居候をしている。

喜市の「口ori」も治り、十日ばかりたつたころだつた。

長屋の周りもすっかり「口ori」の恐怖など忘れ去つてしまつた様子で、暑さの名残の隙間に涼しい風が吹き始めていた。

「ああ、そうだ、清次郎殿。明日から侘助が降り売りに行くんだよ。花売りの彦佐が足あつかいちまってね、人手が足りねえもんだから、昔花売りやつてたよしみつてやつで頼まれたのや。

侘助にはその間俺の代わりだ。鑑札もいらねえし、寝入つてた分、悪いが稼ぎを手伝つてもらわなきやな。」

「しばらくしのげる分はあるだろ?」

「働きやあどうにかなるんだ。折角働けるのに楽しようがなんて申し訳ねえよ。」

「それでは、侘助は浅利の降り売りを。なるほど、いい機会やもしれんな。花売りをしていたとは初耳だ。」

「ああ。まあね」

喜市は興味深げに聞く清次郎に、氣のない返事で誤魔化した。

いかにも誠実な清次郎には、花売りをやつていたことや、なぜやめたかなど話したことがなかつた。そんな様子に清次郎が首を傾げかけたときだつた。

「あんまりもてちいまうもんでもやめちゃつたんだよなあ。帰りは桶が文で埋まるつてなもんだ」

いきなり聞こえた声に驚いて振り向くと、開けっ放しの戸の外には長屋の大家が腕組みをして仁王立ちしていた。

空豆顔をした大家は、特に喜市にとつては、ここに来たときから岸本の代わりに良く世話をしてくれていた、父親代わりのような人物であつた。

「へえ、そりやあ初耳だ。もつたひないな、御主ならそれで裕福にならうものを」

まつすぐな目を向けられると正直困る。

そりやあ、花は売れに売れた。一緒に愛想を売らなきや女郎の機嫌を損ねて商売にならない。しかし、そうして買われた愛想に懸想され仕込まれる文のせいで、どれだけ心当たりのない男から喧嘩を仕掛けられたか分からぬ。

町人ならまだしも、お武家に刀を向けられたときはさすがに喜市もひやりとしたものだつた。

身揚がりだからと、女郎の誘いに乗つた床の最中に、袖にされた男に裸のまんまいかけられたこともある。

それ以来、どうにも喜市は吉原に足が向かないのだ。

「うん、まあ、おしるこの匂いに酔つちまつてね、氣がすすまねえ

のぞ。」

本当の理由を知っている大家は、戸の外でくつくつといらぬながらも笑っている。

「ふうん。なのに行くのか」

「花売りの親分には世話になつたからな。彦佐の足がくつづくまでさ。で、大家殿は何用で」

早く話を打ち切りたいとばかりに、喜市はすぐに話を大家に振った。大家はその用というものをすっかりと忘れていたようで、ふと考えた後、「おお」と目を丸くして手を打った。

「侘助がな、木から落ちた拍子に頭を打つてぶつ倒れてね」

「なんと」

大家が言い終わる前に、清次郎は一気に血相を変えて声を漏らした。「たまさか伊庭のお坊ちゃんの家の近くだつたみたいでね、そこに運ばれてすぐに気がついたらしいんだが、少し様子を見てから送るとよ」

傍らでいそいそと支度をする清次郎は、じつやら迎えにつもりであるらしい。

しかし、それを気まずそうに見つめると、大家は

「今から迎えに行つても入れ違いになるやもしれん。じきに着くだろうよ。

いやあ、実は知らせをもらつてからお客が来ちまつてねえ。話しこんでたら一刻もたつてたつてもん。すまねえな」

と言つてごま塙頭をかけて笑つた。そしてわざとらしく長屋の木戸の方を背伸びして眺めては、まだかとばかりに首を傾げる。

清次郎が我慢できずに浮ついていた腰を上げると同時に、大家は声をあげた。

「おおおお、ほれ見る、きたぞきたぞ」

懐に入れていた手を出して、大家は子供がするよに大きく手招きをしてこちらに導く。

喜市も、そして清次郎も手にしていた支度ものを放つて、わらじを引っ掛け戸口から身を出した。

木戸をくぐってきた侘助は、背負われているそこでぐつすりと眠つていて、果たして安否がいかがなものが伺えず、一人の顔はまだ晴れなかつた。

しかし、清次郎が「侘助」と声をかけると、その背中の上でゆっくりと背中を伸ばして、眠そうにもたげた瞼を擦つて目を開いた。おかげで一人は漸くほつとして侘助を迎えたのだが、そこで妙なことに気づいた。

侘助を背負つてきたのは、ちょうど侘助の通つてる伊庭道場の八郎ほどだらうか、まだ子供と言つような顔立ちが隠しきれぬ、少年であつた。

品のよせわらひなその顔立ちと服の具合から、武家の「」子息かと思つたのだけれども、それにしては付き人もいない、けれども腰には妙に威厳のある「」しらえの刀を一本差ししているので何とも不思議であつた。

「いやいや、お武家様に「」迷惑をおかけしたよつで。」

しかし大家も少年の品のよせわらひな様からお武家だと悟つたのか、手を擦り合わせるよつて近づくと、くこくことその豆頭を下げた。

「いや、元はと言えば私が田を離したのがいけなかつた。まさか今田に限つて家主に見つかはつとは。あやこの柿は絶品なのになあ」意味の分からぬことを呟きながら、少年は侘助を清次郎の部屋の前で下ろした。

侘助は少し着物のしわを伸ばすと、何もなかつたかのようには郎から書付を懐か取り出して喜市に差し出した。書付のないもう片方の手には、つやつやと光つた大きな柿がある。少年の言つていた柿とはこれのことだらうかと喜市はしゃがみこんで眺める。

「侘助お前、それはどうしたんだい」

「平助に教えてもらつてとつた」

「礼は言つたのか？」

書付を受け取りながら喜市が促すと、侘助はくるりと振り返りよろけて見せつつも、自分をおぶつてきてくれた平助に向きなおる。

「ありがとうな」

いつもよつとぶつきらほうな口調で礼を述べると、手にしていた柿の実を「」じじじと服で拭つてその輝きを感心したよつて眺めた。

いくら少年とは言えど武士に対してもんぞんざいな挨拶をしたも
のだから、大家の空豆は傍らでびくびくと少年の顔色をうかがつて
いる。内心都合のよい言い訳でもつけて逃げ出したいのだろうが、
大家という立場上では店子の世話をしてくれた平助を放つて逃げる
わけにはいかず、清次郎と喜市に必死の目配せをしていた。

「申し訳ない、お武家様。侘助が世話になつたみたいで」

大家が干からびる前にと、喜市が補うように口にすれば、平助はさ
して気にもならぬ様子で服のしわを引っ張りながら

「いや別に。俺がちびを良く見てなかつたのがいけないんだよ」

とけろりと黙つて見せた。

喜市がほつとしたのもつかの間、一方の大家は気が済まなかつたら
しく、汗をかきながらへこへこと頭を下げて付け加えた。大家はお
人よしのいい奴だったが、それが度を越すと小心ゆえに誰彼かまわ
ずへつらつてしまつのはどうにも悪いくせだった。

「いやしかし、お武家様に背負わせるだなどとんだ無礼を致しま
して」

その大げさぶりは平助も気にかかつたらしく、眉間のしわを寄せて
煙たそくに空豆を見下ろすと

「いいと言つていろだろう。見苦しいなあ。これだから年寄りは嫌
なんだよ」

と吐き捨てるように黙つて捨てた。

きつい言い草に喜市は顔をしかめたが

「お武家殿、その言い草は捨て置けんませんな
と口を割り込んだのは清次郎だった。

喜市は自分が口にしようとした言葉が清次郎から出でたのにびつ
くりしたが、何よりそう咎めた清次郎の顔が珍しく険しいものだつ
たことに驚いた。

いつもなら侘助の不躾を喜市が叱るうとすれば、まああとなだめて優しく諭す清次郎である。思いがけない言葉に驚いていたのは大家も一緒だった。

「どんな家格のお武家であるうと、それが年長のものに言葉を荒げる理由にはならない。

生きて来た年月にはかなわないのだよ。それだけで敬うに値するのだ。」

「年長の町民」ときにへつらひのか。武士も落ちぶれたものだ。」

「へつらうんじやない、敬うんだよ。」

口を尖らせて言い返す少年に、清次郎は毅然として答える。その脇では空豆が相変わらずの慌て顔で田をきよりきよりとさせていた。

「まあまあ、いいじやねえか。わざわざ本所からこんな所まで重たい侘助を運んでくれたんだ。取り敢えずは礼を申さねば道理が通るまいよ。説教はそれからでもいいだろう。」

ぴりぴりとした一人を見比べては、湯だつて卒倒してしまって顔を赤くしている空豆を見かねた喜市は、ぱんぱんと二つ手を打つのを停戦の合図に、一人に笑いかけた。

しかし、平助の顔はむつつりと清次郎を睨みつけたままである。どうにも喜市が困り果てたその時だった。

「平助、食うか。」

いつの間にやら席をはずしていた侘助は、先まで拭いていた柿の実を四つに切り分けていて、その手に乗せて差し出していた。みずみずしいその実から溢れた水分が侘助の手の上で輝いている。

「侘助、一切れ足りねえよ。」

妙に時が止まつたような氣まずい息苦しさに、喜市は口を開いたが、どうやら侘助はどうとも思っていないらしい。再びすいと手を差し出すといつもと同じように無愛想に

「俺は要らない」

と答えた。

「どうして。折角とったのに。うまかったらう？俺のとつておきなんだぞ。」

そうすかさずたずねたのは、平助、と呼ばれたその少年だった。すっかり清次郎からは視線を外して不思議そうな顔をしている。清次郎の方も、寄せた眉間に緩めて侘助に首を傾げていた。

「眞かつた。」

「じゃあ、何で」

かぶせるように平助は聞く。

「眞かつたから皆に食わせたい。これはもつと眞い。匂いが違う。」
侘助は、何で、と聞かれることが不思議なようで、首をかしげながら肘を伝つた柿の実の汁をペロリと舐めた。

「それに平助は俺にくれたから食つていない。」

「俺はいつも食つてるよ」

「でも、あの木の中でこれが一番眞いだ。」

「食つてもないのにわかるものか」

「匂いが違う」

小気味良い拍子の問答が終わると、平助は納得がいかない様子で侘助を見つめていたままだが、清次郎はその小さな手いっぱいに乗つた柿の一つを手にすると、それをひょいと口に放り込んだ。

余りにためらいがなかつたものだから、平助は少々呆気に取られながらその様子を眺めていた。

「いやあ、これは眞いな、確かに。今年一番かも知れぬよ。平助殿、侘助の鼻はようく利くんだ、間違いないよ。」

容赦ない甘さに笑顔を綻ばせる清次郎を見て、平助は気まず

そうな顔を見せつゝも無造作に柿を拾い上げ、そろいつと口に運んだ。するとその味は侘助の言つとおりのものだつたのだろう、田を大きくした平助は侘助を見ると

「凄いな、ちび。確かに一番美味しい」と声を漏らした。

侘助はそれににこりとするでもなく、ただ少し満足げにこゝくらとうなづくと、隣にいた空豆にもその手を差し出し、柿を食つよう促した。

「こいつもは侘助っていうんだ。いい名でしょう。そう呼んでもあげてくんない。」

言いながら喜市は侘助がつまんで差し出してくれた最後の一切れを食べた。

お、とその甘さに田を丸くしながら、喜市は侘助に上出来だとうなずいてみせる。

「いやあ、いいもらひ物をしたものだ、かたじけない、お武家様」「いや、俺のものじゃないしなあ。」

そう素直に感謝の言葉を向けられると、平助は決まりが悪そつにそうこぼして額をかいだ。

初々しく感じるその額には、まだ乾ききらぬ汗が光っている。

「私は、狩野清次郎と申す。」

へつついの脇に置いてあつた手ぬぐいを取り出して差し出す清次郎に、平助ははつとしたように僅かに背筋を伸ばし

「私は、藤堂平助と申します。」

と言つて、花が風に吹かれるよつて、しなやかに頭を垂れた。

「さあ、早く汗を拭かなければ、藤堂殿」
その様子を見てか、さつきの険しい表情が嘘のように清次郎の顔は
ぐっと和らいでおり、一方の平助もとつぐに強く出る気が失せてい
たらしく、おとなしくうなずくとその手ぬぐいをうけとり、首や額
や胸元の汗を素早くぬぐい去つた。

この時になつて、空豆も漸く安堵したらしく、ろくに歯み砕いでい
なかつた柿を噛み締めると

「ほお、旨い」

と、遠くの山彦のように間の抜けた声をあげた。

「とにかく、今日は大変助かり申した。どれ、お屋敷までお送りい
たします。」

日の暮れるのも早からうと清次郎が心配してさづさづると、平助の
顔には途端に緊張が走る。

「いやいい。どうぞ、お気になされませんよ」

手ぬぐいを握る手に力を込めつつ、言葉を正して丁重に断り清次郎
から目をそらす。

妙にこわばつた顔に清次郎は首を傾げつつ少し思案すると、ああ、
と掌にこぶしを突いてはにかみ

「これは失礼、袴と差しものはして行きますゆえ、じ心配なぞりす
と着流しの襟元を調べながら、袴を履きに部屋に入ろうとした。

しかし、平助はなお頑なに思えるほどに慌てて清次郎の袖をつかみ

「いや、一人で結構です」

と引き止める。清次郎はしばし眉を寄せて平助を見やつていたが、
彼の顔が緩むことはなかつた。

「いいじゃねえか、清次郎殿。いくら若くともお武家の坊ちゃんだ。」

「そうそう危ないことでもあるまいよ」

喜市が柿を食い終えて言えば、視線を逃したままにふるふると上下に頭を振るだけだつた。

「そりが、それならば氣をつけて帰られよ。これからも侘助と遊んでやつてくれな」

腑に落ちないという顔をしながらも、平助が使い終わつた手ぬぐいを受け取ると、清次郎はそれでもつて侘助の甘い汁でべとつく手を拭いてやつた。

「それなら、また、参ります」

ちらりと目をやる平助に、侘助はくくりくくりとした目でくくりとうなずくと、張り合わせればまだべたべたと音がする手を洗いに、井戸端まで走つていつた。

「でも明日から、侘助は浅利の振り売りだらう?」

柿を飲み込み甘さの余韻ににこにことしていた空豆が、気がついたよつに口を挟む。

「振り売り?」

「へえ、天秤棒扱いでアサリを売りに行くんでさあ。喜市が花売りに吉原に行くもんでね」

空豆はそのなで肩に、扱いだふりをしてみせた。

「吉原に?」

「へえ。一軒一軒花をね、売りに回るんでさ。羨ましい限りだね。」

聞き返した平助に、空豆はまたへえこじとにせつきながら話を続け、拳句どうでも良いことを付け加えた。

その言葉に平助の目が僅かに輝いたことを喜市が気に掛けたときであつた。平助の頭が突然下へと振れた。

「藤堂殿、どうなされた?」

平助のいきなりの態度に困惑した清次郎がその肩をつかんで引き起

こしにかかるが、そのまん前に立っていた喜市は何がなんだかと、それを見ていればかりであった。

「頼みがある、私を共させてはくれないだろ？」「へ？」

意味がわからず首を傾げる喜市を、顔だけ上げた平助が見つめ、言葉を続ける。

「私を、その、花の振り売りとこいつに共させていただいたい」「一瞬呆気に取られたものの、同じように呆けている清次郎に気づいた喜市は、慌ててその場に片膝をつけてしゃがみ込んだ。

「藤堂様、お武家様はその様に易々と頭を下げるもんじゃありませんぜ」

喜市は平助よりも低い位置に頭を下げるが、そのままそうしたしなめた。

余りに素早い対応に、清次郎は平助の脇でその仕草を見入ってしまった。

「しかし、どうしても頼みたいのだ」

凛とした顔のままその場にしゃがむと、平助は喜市に懇願した。

「お武家殿、ならねえよ。さあ、おたちなすって。」

きつと睨むように田をやつた喜市に、平助は思わず肩を跳ね上げようになりながらも、頑として立ち上がろうとした。

「藤堂殿」

見かねた清次郎が引き起こしつつしても、平助はその手を払つて喜市と見合つていた。

ため息をつきつつ喜市が見上げてみれば、眉をハの字にした清次郎が助けを求めていた。その更に向こうでは、空豆が浮き出した汗を夕日に光らせながら喜市に向かって、平助を引き起こせと両手で指図をする。

「JRのまきじやわらんどの話を出来ますまいよ。平伏しあつて話し合つなんて、俺も柄じゃないんでね。とりあえず立つてくんなせえ。話はそれからじやねえときません」

そう言つてやつと平助の顔にためらいが生まれた。
すかさず喜市が強い視線を押し付けて

「やあ」

と促すと、平助はしぶしぶ立ち上がった。

「共するつて、一体何のために」喜市が眉間にしわを寄せられ問い合わせれば、平助は少し口ごもつて田を泳がせた。

余りにもわかりやすい動搖に、喜市はその田を清次郎へと差し向ける。

しかし清次郎は、平助のそれを何と取ったのか、喜市に向けて苦笑いを浮かべながら首を左右に振ると

「藤堂殿、わけを話してはくれまいか。何しろ侍が共をして花を売るのは、買ひもつも驚いてしまつだらう。喜市もそんな風に話しては藤堂殿も話しにくいだらう」

相変わらずの鈍感ぶりに、ため息をついた喜市の前で、清次郎が横から柔らかく促された平助は、差した刀の柄をぐつと握つて漸く答えた。

「私もその、花売りといつものをやつてみたい。」

先ほどの同様は何処へやら、きつぱりと言い切つた平助の口は妙に凜々しくて、唚然としつつも思わず喜市は感心してしまつた。

「何いつてやがんでえ」

しかし、あまりに思いがけない答えに、思わず口からぼろつと言葉がこぼれたのは空豆だった。

驚きすぎて、豆のくせに豆鉄砲を食らつたよつな顔をしているものだから、井戸端から戻つた侘助がどつかのおつかさんからもつてきた干し芋を咥えながら覗き込んでいた。

「それははどうこいつ」とですかな

唚然とした喜市と空豆、毅然とした平助の間を割つて、清次郎が口

を挟む。

坊ちゃんの気まぐれかとも取れたが、それにしては喜市が花の振り売りをすると聞いたときの、何か望みを得たような目が引っかかるた。

「人々の暮らしというものを学びたいのです。」

今度は直ぐに、はつきりと言い返す。しかしいかにも腑に落ちていないといった感じで、喜市は眉間にしわを深めた。

「振り売りはわかるが、俺が行くのは吉原だ。そんなところに行つて、咎められはしませんかい」

「しかし、人と言つものが一番わかる街だと、聞きました」

「そりやまあ、違ひねえが」

拍子のいい答えながらも、答えになつちゃいねえ、と口の中であざけながら、喜市は今一つ納得がいかなかつた。

例えば、登校したこともないであろうこの少年が、花魁の美しさを聞き及んでいたがゆえに、憧れを持つのは喜市もわからぬわけでもなかつた。振り売りをして見たいというより、吉原といつ言葉に反応しているのではないかと喜市は踏んでいた。

しかし不思議なことに平助からは邪な心も感じられなければ、憧れに浮かれるような雰囲気も見出せなかつた。

ただ真摯な目のみが喜市を指した。

「それでも、お武家の坊ちゃんを働かせるなんて出来ねえよ

困り果てた喜市が口にすると、平助は少々顔を曇らせた後で、そのかぶりを振つた。

「私の母上は町人です。」

その言葉にはみな驚いたが、だからといってお武家なことに変わりはない。町人の娘を武家に養子に入れ、同格の家に嫁がせることは

稀なことでもない。

それに武家と言えども、庶民じみた趣味を持つ人間は数え切れないほどにいる。大商人のほうが今ではまるでお武家のような振る舞いをしている者もある。

しかし果たして平助の言つ庶民の生活への興味が果たしてその類のものなのだろうかと量りかねた喜市は、やっぱり返事をすることが出来なかつた。

「なれば、やつてみるが良いさ」

思いがけぬところからあつさりと承諾したのは清次郎だった。

その言葉に一瞬にして平助の顔に光がさすが、一方意表を突かれた喜市は跳ね上がるよつに立ち上がると、思わず言葉を荒げた。

「清次郎殿、そういうわけにはいかんだりよ。いへり母上が元は町人とて、お父上にしれねばどうなることか。」

そりやそりや、と弱弱しく空豆が加勢したが、平助が目線をやるとひょつと肩をすくめて口をつぐみ、眉を上げた。

「父上に会う」とはあります。心配は無用です」

「しかしなあ」

おつづけるよつて言つ平助に、言つべき言葉も見つからず、喜市はそれ以上ものをこうのをやめてしまつた。しかし空豆はそんな喜市に向かい顎をしゃくつて、断れと促す。

店子にもし不手際があれば、差配の不手際にもなる。空豆が嫌がるのも無理はなかつた。

意向を受け取つた喜市のはうは、ため息をつきながら言葉を搜したが、正面の真摯な目に急かされてどうにもいかず、逃げるよう視線を清次郎へとむけた。

すると、清次郎はその意図を得たらしく、穏やかに笑い「藤堂殿」とその口を開いた。

「まあ、まだお勤めも始まらぬうちに、このようなことは土台無理な話だ。見聞を広げるには広めるにほいい機会だと思うんだがなあ。」

期待に満ちた目で見つめる平助に、眉を下げる

「しかしながら

と清次郎は付け加えた。

「剣術や文字を怠ることがあれば直ぐにでも辞めて頂くことにはなるが。」

下がり眉でありながらも、さすがに剣を人並み以上につかうだけあって、清次郎の目の中は厳しさを持っていた。平助もどうやらそれを感じ取つたらしく、ぴしりと姿勢を正すと静かにゆつくりとうなずいた。

どこか取り残された心持の、喜市と他の二人が、その両名の妙に通じ合つた様子をぽかんと眺めていると、今度は「けりけり」を向いた清次郎が、喜市に向かって少し頭を下げる。

「私からもよろしく頼むよ、喜市」

そんな風に言われてしまえば、喜市だって断り切れるはずもない。一度まとまった話を解いたところで、また振り出しへ戻るだけなも喜市にはわかつていた。

せめてもの抵抗で一二度首を傾げ、ため息をつきつつも

「わかったよ

と言つ他になかった。

空豆は真っ赤にゆだつた顔を今度は白くして、節くれだつた手で顔を覆つとがつくりと肩を落とした。

「それはそうと、昼見世前だから四つより前に行かなきゃ なんねえが、例えば剣のお師匠さんなんかには怒られないでしょうかね。道場つてのは朝早いんじやないのかい」

不意に空豆が顔を上げて明るくして見せた一方で、平助は途端に顔を曇らせる。やはり堂々と言えない後ろ暗い思いがあるのかとため息をつく喜市を他所に、清次郎は弟でも思いやるような穏やかなまなざしをむけた。

微笑ましい光景だと緩んだ喜市の中に、すっと悪い予感が横切り、またそれは残念なことに的中してしまった。

「藤堂殿はどちらの道場で」

「玄武館道場です。北辰一刀流の。」

渋い顔をさせたまま力なげにいう平助とは対照的に、清次郎の顔は明るくなつたように見えた。悪い予感が確實なものとなりつつあるのを、喜市は、そして空豆は実感して同時にため息をつく。しかしそんなことなど全く気づかない様子で、浮つき気味の声の清次郎は続ける。

「それならば余計に都合が良い。深川に、伊東道場と言う私がお世話になつていい道場があるので、その分の稽古をそちらで付けられるように計らいましょ。ただし、半月だけ。」

話がすすむにつれ期待に胸を膨らませる平助に対し、さも名案だというような晴れやかな顔できつぱりと言い切る清次郎であつたが、そこに喜市が口を挟む。

「しかし、清次郎殿。玄武館って言つたら俺だつて知つてる大道場だ。そのお師さんが町人の真似事なんざ許すかね。ましてや他の道場で稽古だなんて。」

半ば突つかかるように口にする喜市の意図も汲まず、清次郎は落ち

着き払つて笑みまで湛えて答える。

「玄武館であれば返つていいかもしない。あそこは志さえあれば誰にでも門戸を開く懐の深い道場だ。無下に駄目だとは言わないだろ。それに、俺から道三郎殿の方に、少しお預かりをしたいと口ぞえしておこつ。」

「先生を知つてゐるのか」

喜市が言葉を返す前に清次郎の言葉に反応して飛びついたのは平助だった。

思いがけない言葉を聞いたためか、言葉の使い方も忘れて声をあげていた。

「千葉先生のご子息と知り合いなのがい、狩野殿」

大家も思わず萎縮した体を忘れて口を挟む。清次郎はその空豆の驚きに首をかしげながら「はい」とうなづいた。

千葉道三郎は江戸の四大道場に数えられる玄武館の現在の主であり、北辰一刀流を開いた千葉周作の三男であった。その名は武家のみにとどまらず、町屋の人々にも知られていた。

清次郎が稽古をつけている深川の伊東道場はその北辰一刀流の道場であるのだ。

「大蔵殿と玄武館に伺つた際にお話して以来、たまに酒をご馳走になつたりするのだよ。」

目を見開いて体をついかぶりつくように前に傾けている平助に、清次郎は笑つて答える。

なるほどだから随分酒の匂いを漂わせて帰ることも多くなつたのかと合点しつつも、喜市は清次郎がそのような高名な人物と知り合いだと言つことに空豆と同様に驚いていた。

当の清次郎はそんな驚きのわけに気づくこともなく、平助が北辰一刀流だという偶然に嬉しそうに頬を緩めていた。

翌日、午前の稽古を終えた後、頃合を見計らつた清次郎は玄武館へと早速足を運んだ。

空はすっかりと高く、大川を渡す永代橋に差し掛かれば、少しばかり体を冷やすような風が更々と肌の上を撫で、帰りがけに湯屋に寄つた清次郎には至極心地が良かつた。

こんな時には田楽を肴に燭で一杯も悪くないな、などと考へてゐると、橋の袂で丁度良く田楽の屋台に出くわし、清次郎はふらりと立ち寄つてそれを買い求めた。

竹筒に田楽を押し込んでいる間、店主と屋台の客は不思議そうな顔をして妙に浮かれた一本ざしの清次郎を眺めていたが、清次郎はそんなことにかまう様子もなく、手に入れた好物を満足そうに眺めながら再び玄武館へと歩を進める。

玄武館は清次郎達の住む亀井町からそつ遠くはなく、それ故に清次郎は度々こうして肴を持参して年の近い道三郎と酒を交わすのだ。だから、千葉道場の門前に立つとすぐさま門番を請け負う男は

「道三郎様ですね」

と、凜々しい顔のまま清次郎を取り次いでくれた。

「やあ、丁度良い時間に来ましたな。」

下男に導かれていつもの部屋に通されて直ぐ、にっこりと人のよさ
そうな笑顔を浮かべた道三郎は、稽古を終えたばかりなのだろうか、
手ぬぐいで首を伝う汗を拭きながら廊下をやつってきた。

「汗だけちいと拭いてきます。申し訳ないが待つていてください。」
そう言つた道三郎は、清次郎がひよいと翳かざした田楽の入つた竹筒を見ると、「お」と声を上げんとして口を開け、喉の奥からごく遠慮がちな喜びを漏らしてその笑みを益々強める。威厳のある顔つきをしていても、それがひとたび緩めば案外屈託のない笑顔を浮かべる道三郎の顔に、清次郎は伊東よりも深い親しみを感じていた。

「やあ誰か」

そう呼んでやつてきた下女に「あちらを預いて温めておいてくれるか」と道三郎が告げると、清次郎はその早くもあかぎれをこさえそうな、つやつけのない下女の手に竹筒を託した。

高名な千葉道場の屈強な者達の先頭にあつて、道三郎は穏やかで人当たりの良い青年だつた。勿論ひとたび剣を取ればまるで手妻で誰かと入れ替わりでもしたのではないかと思うほどの俊敏な動きには目を疑わされる。

それでも平時には春の野山のようにのんびりとすこすこにか似たような雰囲気を持つ二人は、何度か会つうちにすっかりと良い呑み仲間になつたのだ。

しかし当初、あの本家本元の玄武館道場の主に会いに行くと伊東に言われたときには清次郎は随分恐縮したものが、会つてみれば拍子抜けするほど「剣豪」とは程遠い柔らかな雰囲気と、思いやりのある人柄にすっかり魅せられてしまつっていた。さすが大道場の道場

主ともあれば、えらぶることもなく山が」とベビッシリと構えるもののかと感心すらした。

清次郎が通されたこぢんまりとした六畳ばかりの部屋も、文机の脇には整然と書物が積み上げられ、塵一つないと見受けられるほどに掃き清められていて、部屋の主の人となりを映し出していた。

「恐れ入ります。狩野様、お酒は冷でしようか、燭にいたしましょうか」

少しして先ほどの下女がうるたえ氣味に清次郎に話しかける。こちらを見てはいるものの、命わせはしない目がたたみを見つめて左右へと迷う。

「蠅のような小ちくて可愛らしい目は澄んでいて、まだ幼さを覗かせていて、清次郎は思わず微笑んだ。

「そうだなあ、燭でお願いしようかな」

返事をした下女が立ち上がろうとした刹那、清次郎は思いついてそれを制止した。首をかしげて袖口で顔を隠す下女ににこにこと笑みを向けながら、来る途中で買い求めた飴を袂から取り出すと年に似合わず落ち着いた紺色の着物に覆われた丸い膝の前に置いた。

「少ないが、皆であがつておくれ」

文中は飴の入った包みに視線を落とすと、自然と顔を覆っていた袖を下ろして僅かに頬を緩めて見せたが、すぐにそれを打ち消して首を振る。真一文字に締められた唇の凛々しさは少年のようだった。

「いただけません」

「はて、飴は嫌いか

しまった、と清次郎は表情を曇らせた。自分がそういうものに疎いことを十分わかつていた清次郎は、素直に今度は大福にしようなどと考へ込むところだった。

「そんなことは

それを見て慌てて声をあげた下女は、はつとした様子でその掌で自分の口を塞ぐ。

自分のはしたなさにほのかに赤らめた頬が可愛らしくて、清次郎は声をあげて笑ってしまった。

「いいから、もし遠慮をしているのなら気にせずおあがりなさい」手を出さぬために、膝の上にぽんと飴を包んだ紙を置かれた下女は、顔にほんのりと笑みをたたえてあかぎれの手に大切にその包みを収めた。

「有難う御座います」

深々とこぢんまりとした頭を下げる姿に参ってしまった清次郎は、気まずさを誤魔化しながら言葉を足す。

「何か、好きなものはあるかな」

しかし、顔を伏したままの下女は「いいえ」と小さくこたえてからさつと頭を下げると、逃げるよつに廊下を走ると滑つて消えていった。

「いやはや、狩野殿は罪作りだ」

汗を拭き終え廊下を戻ってきた道三郎は、去つていく下女の背中を見つめ、赤みの少し退いた顔に僅かについたしづくを手ぬぐいで拭いながらちらりと清次郎に目をやる。

しかしその意図わからず、ただはて、と小首を傾げるだけの清次郎の向かいに腰を下ろした道三郎は、張り合いのなさに苦笑いを浮かべた。

「いや、菓子の先生。すっかり女中たちのお待ちかねですな」

ふふふと笑う道三郎に漸く意味を飲み込んだ清次郎は、しゃれの効いた言葉を返せるわけもなく、ただただ照れ隠しで首の後ろをかいでは誤魔化した。

色恋のからかいに清次郎はうとい。

誠実さと剣の腕もあつたが、そんな垢抜けないとこりは、道三郎が清次郎を気に入つた所以でもあつた。

「清次郎と呼んでいただいてよろしいのだがなあ

「いや、年長の方にそうは行きますまい」

温和に見えて、このように道三郎の芯は頑として動かない。これがまた、清次郎が道三郎を慕う要因の一つだ。道三郎がこう言うであろうことは百も承知な清次郎は、それ以上押したりなどはしなかつた。

「伊東くんはお元気ですか

「はい、変わりなく。最近は遅くまで書物を読まれているようで中々こちらまで出向く」とも出来ないようだけれど

「ああ、あの人はそういうのが好きですからな。最近お上の方も世間も、夷敵だ開国だなんだと騒がしいようだし、一層熱が入つておるのでしよう」

「しかし、攘夷より先に飯を食わねば大蔵殿が倒れてしまわぬかが心配事です」

清次郎が浮かべた苦笑いに、道三郎は「いもつとも」と方眉を上げて頷いた。

思わずそのままいつもの世間話になつてしまいそうだったのを、清次郎ははつと気づいて引き止めた。

「今日はお願ひがあつて参つたのです。道三郎殿。」

「はて、何かお困り」とでも「藤堂平助と言つて武家の『子息が』いかに通つておつままでじゅう

平助の名前が出ると、道三郎は少し眉を引き上げて驚いて見せ、首をかしげながらも「ええ」と答える。

少し目を左右に振つて何かを探ると、今度は首を反対の方向にかしげた。

「あれは少々乱暴なところがあるが、中々骨のあるしつかりとした子です。

ただ少しづがままで融通が利かぬこともありましてな。いやあ、もしやそれで平助が何かご迷惑をおかけしましたか。」

真摯な瞳の中に若干の不安をよぎらせる様子をみると、どうやら平助の素行は普段から褒められたものではないらしい。それが想像通りで、道三郎の苦労を浮かべた清次郎が思わず笑い声をこぼしたのを見て、道三郎は氣まずそうに頬をかいた。

「先日、『』縁で知り合つまして。長屋で私の向かいに住んでいる振り売りの男の話を聞いていましたば、是非一度振り売りをしてみたい」と。

「また、何と言つ

清次郎が言い終えるより早く、ばかげたことを、と繰り返した言葉を飲み込んで、道三郎の口からは代わりにため息が漏れる。どうやら、平助は想像以上に悪名高いらし。

しかし、清次郎の方も請け負つたと直つ責任があるものだから、その程度では引つ込んでいられないと、早々に言葉をおつつけた。責任というよりは、そういう子供だからこそ、市井の暮らしを知れば素行も変わるやもしかんと清次郎は期待を抱いていた。

「それが、自分だつて半分は町人の子でもあるからと。剣術だけではなく町人の生活も知つておく必要があるのではといっておりましてな。いやあ、中々考え方のある子です。」

「それは確かに半分はそうかもしれないが。いやいや、半分どころか平助の言い分はまるきりただの建前であります。本当のところはただ商人というものに一時興味が沸いただけでしょうな。何でも興味を持つのはいいが、素晴らしいのは飛び出すときの勢いだけだからなあ。あいつめは。」

随分真剣な顔をして語つてみても、声の中には噛み潰していたのであろう可笑し味と慈愛が満ちていて、師匠だけあり平助のことを良く把握していると見える道三郎の前では、清次郎がわざとらしく並べた文句は全く意味のないものになってしまった。

「さすがは道三郎殿」

まいつた、と觀念して眉を下げれば、道三郎は堪え切れずに声をあげて笑つた。

狭い部屋に響く笑い声の隙間に、もう蜩の声がかなり大きく入り込んでいて、清次郎は一瞬それに気を取られた。

暑さが思い出したように口中に襲つっていても、季節はすっかりと秋へ足を踏み入れていた。

昨日の小ぶりだが熟れた柿が何よりの証拠だ。

「で、どうして平助でなく清次郎殿が私のもとへ」

運ばれた茶に口をつけつつ、足を崩すと清次郎にも田でそつするよう促した。

「それが棒手振りに行くのは稽古に支障が出る時分でしようと思いまして、よろしければその分は私が伊東道場で稽古をと思いまして。半月ほど、いかがでしょ。」

お家を背負う頃になればこのよつた自由も利きますまいし。

一応同じ流派であれど、自家からお預かりするのでは、やがてど、了承を得る手はずを教えていただきたく。

藤堂殿についても私は、例え今は建前であつと市井の暮らしどりを身をもつて学ぶことは、学問にも劣らぬと感つのです。

「むつ。」

顎に手をやる道三郎が悩む姿は、凜々しい顔に何処からか皺が集まつてがんものようで愛嬌がある。しばらくがんもは黙り込んで、首をひねるとちらりと清次郎へと目をやつた。

「して、何の振り売りを」

「花です」

途端に道三郎は破裂したよつと漏らして笑い出した。余りにそれが大きい声だったので、さつきまで障子を隔てて鳴いていた蜩が鳴くのをぴたりとやめてしまったほどだ。

「平助が花ですか。それはいい

そんなことなど氣づく様子もなく、道三郎はその顔を緩めて膝を叩き大いに笑つた。

しかし清次郎は、道三郎が黙り込んで悩んで見せた時点で、ああこれはだめかも知れぬと思つていた。清次郎の呼び方の件でもそうであるように、一度これは納得いかんと思えばこでも動かぬのが道三郎だということを良く知つていた。

これまでか。さて平助にはどう説明したものかと清次郎が考え出したとき、思いがけない言葉がかかる。

「まあいいでしょ、あいつも私と一緒に、決めたら動かぬ男です。」

あつさりと予想を裏切られたことに驚く間もなく、道三郎はきゅつと顔を引き締めて言葉を続ける。思わず清次郎もぽかんと開きかけた口をきつめに締めた。

「ただし。もし平助に粗相や怠惰が見えましたらば、見逃すことなくお返しください。

未熟者とてこここの門人です。狩野殿のもとにあらうと捨て置くことは出来ません」

視線で念を押されると、清次郎はゆっくりと頭を縦に振った。かぶつ

「無論。ご安心ください」

きつぱりと清次郎が答えると、道三郎も満足した様子でうなずいた。
「どうぞ遠慮なく稽古してやってください。他所で稽古が出来ることも平助には良い経験ですので。狩野殿なら尚更だ。」

清次郎の腕前は、大蔵によつて連れてこられたときに既に道三郎の目に留まつていて、尚且つ四大道場に数えられる練武館もお墨付きだと言うので、俄かに噂に上り始めていた。

しかし、清次郎は事情があつて仮病を使い実弟に家督を継がせた為に変名を用いていたので、噂の人物が大蔵の連れてきた清次郎であると知つたのは、すっかりと打ち解けた頃だった。

実は道三郎からすれば、今回のことは平助との縁がもとで清次郎が

「こちらに居つてことにはならないかという期待をもつての答えだつた。

噂に上る剣さばきを見てみたいという思いに駆られていた道三郎は、実際に清次郎と立ち会つてからはすっかりそのどりこになつてしまつていた。

それをただ分家の客分にしておくには実にもつたいたいと思ったのだが、清次郎の人柄からして自分を拾い上げてくれた伊東道場からそう易々とは出まいとわかつていたのだ。

「ありがとうございます。大事にお預かりいたします」

そんな道三郎の意図も知らず、清次郎はきつちりと頭を下げ礼をすると、あとはもう一度良く運ばれた田楽と燗でいつものよつに飲み交わすのを待つばかりだった。

「しかし厄介だねえ、本当に振り売りをやるのが目的なんだろうか、あの武家の坊ちゃんは。」

一刻半ほどして清次郎が長屋に戻り、酒の匂いがほのかに漂つ息で、意気揚々と喜市に成果を報告する。

喜市からしてみれば商売、しかも人様の持ち回りを預かつての事でもあつたので、素人を連れて歩くだなんぞ、ましてや相手は武士とあつて、氣も遣うもので面倒と厄介以外の何者でもない。

しかし文句を続けようにも、酒の入った清次郎はすっかりといい気分で、人の良さそうな顔で「良かつたなあ」だの「申し訳ないなあ」だの言われては、それ以上愚痴をこぼすことも出来なかつた。

「まあ、千葉のお師匠さんの言つとおり、面倒を起こしたら例えお武家のお子でも、俺は清次郎殿につき返すからな」

とだけ告げると、かすかな抵抗のつもりか「俺は寝るよ」と清次郎を追い返すように寝転がつて背を向けた。

翌朝、日が地の淵から漸く体を浮かせた頃、喜市の部屋の腰高障子がガタガタと揺れる。

瞼に目が覚めてうとうとしていた侘助は瞼をこすりながら、風もないのに揺れる戸の隙間からこいつそりと外をのぞいた。

「平助か」

「おう、侘助か。市場に行くんだろう。まだ旦那は寝てるかい」「障子を隔ててすつきりと晴れたほの暗い空を背負い、平助は掠れるような小さい声を出す。

「今、起こす」

侘助はそう言つと徐に夜着に包まる喜市の胸の上に跨り、足を浮かせてはのしかかる。

とたんに喜市は寝苦しそうに顔を歪め、まだ夢つづなのか目を閉じたままばたばたと手で侘助を押しのけようとした。しかし侘助も心得ているようで、それをうまくひよいひよいとかわすと、今度は足をぶんぶんと振り回して喜市を揺さぶった。

それに漸く声をあげて悶えると、喜市は口をぱひりと開いて侘輔を睨んだ。

「お前はもつとましめ起こし方が出来ねえのかよ。これじゃあ瞼からはらわたが出ちまわあ

文句を言い言い腹に乗つた侘助を下ろしながら、喜市は障子の外の気配に気がついた。

「誰だい」

「平助だ」

侘助と平助の口から同時に出てた言葉が、重なつて喜市の中耳に届く。

半ば眠つた体をゆつくりと起こし障子を開ければ、そこには昨日の少年が妙に引き締まつた顔でそこに立つていた。きつちりと着込まれた着物を見て、喜市はため息をつく。

「お武家殿、袴で振り売りなんざ聞いた事ありませんぜ。はいんな。

」
喜市は体を部屋に引っ込めると、行李を探つて股引きと着物を取り出した。

傍らでは侘助は少し欠けた火鉢を出して火を入れようとしている。八月も半ばが過ぎて朝晩はすっかり冷えるので、最近はこれが侘助の一日の初めの仕事になつていた。

「侘助、ついでにお武家様に餅を一つ温めてやつてくれんな。」

言いながら棚から布に包まれた餅を出すと、それを小さな手に預けた。

「お武家様、これに着替えてくんなさい。日がてっぺんに昇ればちつたあ暑いだろうが、そんな足の青つちりいのは振り売りにはいいないんでね。それと、失礼は重々承知だが、それを着たら貴方様はもう振り売りの見習いだ。言葉遣いも俺は相応にさせていただきますぜ。」

さあさあ、と平助を部屋に引き入れると、その胸元に手にした一式を押し付けた。

平助は雑に見える扱いに一度口をむつと屁の字に曲げたように見せたが、それも直ぐに引っ込めると早速着替えだした。

元々綺麗な顔立ちをした平助は、町奴の格好をすれば一層歌舞伎の売れつ子役者のように、喜市が気を回した股引きもそれを引き立たせるものとなつていた。

「お武家様にそう着こなされちゃかなわないな」

ふふと笑いを漏らした喜市に、漸く平助も頬を緩める。

しかし、ぱちりと音を立てた炭に驚き、ひょいと飛び上がった侘助が平助が畳の上に置いた刀の上にしりもちを突いた瞬間だった。

「どけーー！」

と突然血相を変えた平助が声をあげた。思わず侘助も肩をすくめ慌てて腰を上げたが、そのために感覚をしづじつてしまい、ふらついた拍子に箱膳にぶつかり、がたりと音を立ててから茶碗と一緒に土間の上に転げ落ちた。

喜市は「どうとまだしゃつきりと目覚めていなかつたせいで、何が起きたのかが待つたく理解できていなかつた。」目を見開いて、ぼうつと平助を眺めるのみで、やつと刀を目に入れたと同時に、がらりと戸を引いて入ってきたのは清次郎だった。

「やあ、朝早くから騒がしいが、どうした？」

清次郎はもうとっくに道場へ行く仕度を済ませていたようで、ぴしりと撫で付けられた野暮つたいほどに綺麗な髪と、のされてぱりりと音が響いてそうなほどの大袴を身に着けていた。

長屋にはあんまりにも似合わぬもので、笑いそうになつた喜市が口許を歪めたのを見て、清次郎は意味を履き違えたまま勝手にそれを深刻に捕らえて平助に目をやつた。

清次郎にそうして見下ろされば、平助もバツが悪そうに視線を横に逃がし、その脇ではじべたに座つたままの侘助がわけもわからぬままに清次郎を見上げる。

「何か不都合があつたかな、藤堂殿。」

少し腰をかがめた清次郎が、覗き込んで聞く。視線をそらしたままの平助にたまりかねて喜市が

「清次郎殿」

と声をあげたが、それは清次郎がちらりと喜市にやつた視線で制止されてしまった。

「藤堂殿」

しつかりと口に出された声に、とうとう平助は顔を向けると、少しだけ下唇を噛んだ後で答えた。

「ちびが私の刀の上に腰掛けたのです」

言つてまた、下唇を噛んで清次郎を見上げる。

理由を聞いた喜市は眉毛を引き上げて侘助と視線を交わすと、侘助はまだわからぬといった風に眉間に可愛らしいしわを作つた。そんなことで、と喜市はため息を漏らしかけた。

が、しかし、清次郎が予想に反した言葉を口にする。

「なるほど、それはもつとも」

言つて、じっくりと頷くと、清次郎は侘助を抱き上げた。

侘助の尻についた湿つた砂が、清次郎の清潔な袖にこぼれる。袖が汚れそうになるので、喜市は「おいおい」と声を上げかけてしまつた。

「侘助、刀は私たちの身と同じなのだよ。血が通つてゐるんだ。わかるかな。」

「わからん」

優しく言い含める清次郎を余所に、侘助があつさりと言い放つたのがおかしくて、喜市は慌てて口の中に笑い声をとどめた。

「そうだなあ、刀は体から離れちやいるが、狸で言つたら尻尾みたいなんだよ。」

なければ格好がつかない。それに、少し凄いところがあつてな。これはいざというときには人を守ることも出来る。」

一瞬、喜市はひやりとした。わざわざ清次郎が狸で例えるものだから、まさか侘助のことがばれやしないかと案じた。

それは過ぎた心配に終わったのだが、少し茶化したような清次郎の言い振りに、平助はまた顔をむすりとさせた。

侘助は抱き上げられたまま目を左右にぐるりとめぐらせると、ほつ、と言わんばかりに目を少し大きくして、尻を押されて頷いた。それをにこりとして迎えた清次郎は、平助のほうに視線をやる。むくれた顔を少し解きながらも平助は下唇を再び噛んだ。

「さすが、武士のお子だ。近頃は刀を質に入れる侍も多いのだがね、これは武士の心だ。

武士が刀を^{かき}翳して威張り散らす時代ではないが、いざといふときには主や守るべき者のためにいつでも抜けるようなおくものだ。

藤堂殿のお怒り、「ごもつとも」

先ほどまで優しく笑みをたたえていた顔は一変して、清次郎は頬を締めた後でゆっくりと口にした。

当の平助は、真っ向から褒められたことに照れたと見えて、頬をかく仕草で誤魔化していた。

「それでは、大変だろうが、また夕に。」

侘助を下ろすと清次郎はさつさと喜市達に背を向け、戸をぐぐり際に

「平助殿、伊東道場までの道は平氣か」

と聞き、平助が頷くとにこりと笑って自分の部屋へと戻つていった。

その姿をじつと見つめていた平助を横目に、喜市は仕度を続けた。侘助は落ちた茶碗を拾い上げ、風呂敷の餅を火鉢の網の上へと乗せる。

吹き抜ける朝の風が涼しすぎるせいか、じろりと間違えたとみえる蜩が、近くでかなかなど鳴いていた。

「すまなかつた」

清次郎を見送った姿と変わらぬままで、平助が咳く。しかし、余りにさりげなく口にした言葉に気づいたのは喜市のみで、侘助は中々暖かくならない火鉢を覗き込んで炭と睨めっこをしていた。

「ちび。」

聞こえぬ返事がもどかしいらしく平助が声をかけると、侘助はもうちつともさつきのことなど気にしてないといった風に口をきょとんとさせて振り返った。

「侘助だよ。」

不意に口を挟んだのは喜市だった。平助が振り返って見てもそれ以上喜市は何も言わず、仕度をする田も手もそのままずんずんと進んでいたが、意味を合点した平助は再び侘助の方に顔を向けると背筋を少しだけ伸ばした。

「すまなかつたな、侘助。」

気まずそうに直ぐ口を結んで笑うこともしなかつたが、侘助はそれさえも全く気に掛けていなかつたようで、すぐさま額くとさつさと火鉢に視線を戻した。

あまりにもあつさりとした返事だつたせいか、平助はもう一言ばかり何か言いたげにしていたが、それは喜市が差し止めた。

「侘助、お前も平助に謝りな。」

促されると侘助は火鉢から顔を上げ、平助の突つ立つ方を向いて立ち上がると「すまなかつた」と一言短く口にして頭を下げた。少し照れて目をそらした平助は、一つ頷くと小さく

「俺も悪かつた。侘助。」

と再び口にした。

暫くして漸く焼けた餅を急いで口にすると、侘助は小さなざるの乗つた天秤棒を担いで、二人よりも早く仕事へと出かけた。

「まだ出かけないのですか」

開いたばかりの木戸をくぐる侘助を見送り際に、平助が尋ねた。時刻は明け六つの鐘がすっかり鳴り終わった頃だった。

「明日からはもうちいと遅くても大丈夫だ。吉原には姉さん方が起きる頃につけばいい。」

「そうじやないと物売りの声で起こしちまうからな。」

「じゃあ、なんどき何時に。」

平助の顔は妙に真面目だった。不思議に思わなかつたわけではないが、喜市はそれでも馬鹿に真面目なもんだと思えば合点したので、それ以上気にはとめなかつた。

「仕入れるのは吉原の奥の金杉つて所だ。仕入れてそのまま引き返せばいいだけだから、一刻見れば十分だよ。」

「それでは、なんどき何時につくんだ。」

二度聞かれて、喜市はふと話を止めた。やはり先ほどと同じく真剣な顔を張り付かせたままの平助は、訝しげに窺う喜市の視線に気づくと、はっとわざとらしく顔を緩めて言葉をつなげた。

「いや、それならば道場にはいつごろに着くのかと不安になつてしまつて。」

伊東道場は先日狩野殿と伺つた一度きりしか行つたことがないもの

で。不案内が不安なんだ。」

苦いものを口の中でつぶしたまま笑うようなぎこちない笑顔に、喜市は内心「厄介なものを掴まれたかもしれない」と心にもやがかかっていくのを感じていた。

しかし、平助の企むものが何か、詳しい見当がつかないうちは断る術もなく、喜市はため息をつきつつ部屋へと踵を返した。

「四つより少し前につけばいい。五つ前にはここを出るからな。売るのもそうかかりやしねえから日の高いうちに大門をくぐれるよ。安心しな。」

言つた後で、喜市は不意に振り返つて平助の表情を覗き見た。想像通りの浮かない顔に、喜市の不安は増すばかりだった。

五つの鐘が鳴り始め、空の籠をよつと担いで漸く神田の長屋を出た二人は、なるべく道のわかりやすい大通りを選び、半刻ばかりで浅草の脇、大川の堤沿いに川上へと進んでいた。

既に平助の額には小さな玉の汗が浮いていたが、一方の喜市は少しばかりにじませる程度で涼やかな顔をしていたので、休むことを申し出ることも悔しいとみえ、息を荒げながらもついてきていた。

しかし吉原へそれる道を通り越し、金杉につくやいなや平助は農家の庭先にへたり込んでしまった。

白かった足の甲は、跳ね上げた石のせいだろう、小さな赤い疵をいくつも作っていた。

鼻緒を引っ掛けた指の又も随分と擦れている。それでも泣き言一つ言わずにってきた平助に、喜市は感心していた。

「あれまあ、こりゃあ痛いだろつよねえ。ほら其処に座つて足をお出しよ。」

まだ小さな孫娘と共に体が隠れそうなほどの大量の花を持って出てきた、花問屋のおみよといづばあ様は、筵の上に花を置くとすぐさま平助の疵だらけの足を見つけ、しゃがみこむとその節くれだつた皺の深い手で平助の白くなめらかな足をさすつた。

「喜市、こんなお坊ちやんに無理をせちやあいけないよ、お前とはお育ちが違うみたいじゃないか。」

「へえ、わかるかい」

煙管を吹かして一服する喜市をおみよはじりつと睨んでしかりつけると、その見かけに似あわぬ素早い動きで家中に戻り、何かを大事そうに手に包み戻つてきた。

そして手際よく平助を座らせその足を濡れた手ぬぐいで綺麗にぬぐうと、手に持つ貝の中に入つていた軟膏と思しきものを平助の足に塗りつけ、手ぬぐいを裂き、鼻緒に当たらぬよう巻いてやつていた。

「わるいなあみよさん」

余りの手際のよさに端で感心してみている喜市に氣もやらず、おみよは平助にしきりに「痛くないかい、きつくないかい」と声をかけていた。難しい顔をしたまま足を投げ出していた平助は酷く抛り所のなさそな顔をした後で「すまない」とぼつりと呟いたが、少年らしさに思わず口を歪めた喜市に氣づくと、ばつが悪そうに顔を背けてさつと足を引き揚げ、急いで花の入つた籠を肩にかけてそそくさと門へ駆け出した。

「馬鹿だねえ喜市。あんな意地の強そうな子にそんな顔したら直ぐに臍曲げるに決まつてるじゃないか。」

気分を悪くするわけでもなく、からからと笑いながら曲げた腰を伸ばすおみよは、平助の背中にまぶしそうに目を細めていた。

「その意地の強さに参っちゃってるんだよ」

煙管の葉を詰めなおしながら喜市が片眉を引き揚げて苦く口にする

と、おみよは一層高く笑い声を上げる。

隣で餌をつついていた鶏と、それを眺めていた孫娘が、同時にびくりと体を跳ね上げた。

「そりやあ喜市、お前さんだつていい勝負だつたじゃないさ。今じやかつこつけてそんな洒落た手ぬぐいなんてかぶつちまつて」笑うだけでは飽き足らず、ばしばしとおみよが喜市の背中を叩くので、詰めたばかりの煙草の葉は煙管からぼろりとこぼれてしまった。鶏が突つつき始めたのを慌てて足で追い払う。

「お前さんがいっちょ前に文句言えるようになつたご恩返しだと思つて、ちやあんと面倒見ておやりな。」

捨いあげた煙草の葉を再び詰めなおす喜市は、生返事をしながらもいっぴしの口を叩いた気恥ずかしさを隠すように、かぶつた流行の柄の頬かむりを正すと、土間の隅に自分たちのために置かれた小さな火鉢から火を貰い、先ほどの平助のようにそそくさと外へと出て行つてしまつた。

垣根で出来た門まで出ると、小さな孫娘の見送りの声が後を追いかけてきたので、つい喜市は振り向いた。するとその奥には穏やかで見透かしたような笑みをたたえるおみよがいて、喜市は観念して頬かむりをとるとひょいと首にかけ、大きく手を振つた後で歩き出した。

「昼もかわらず人がいるんだなあ

大門の外から伸びる衣紋坂にある、見返り柳といわれる柳の木に差し掛けた時、平助が間延びした声を漏らす。

「昼見世も近いしなあ。通いの髪結いだの、俺らみたいなもの売りが殆どだよ。しかし平助、夜見世がどんなものだか知ってるのかい」喜市は何気なしに返したものの、後ろから付いてくる平助が妙に押し黙っているのを感じて立ち止まつた。えもいわれぬ嫌な予感が喜市の中を駆ける。

振り向いてみれば思つた通り不穏な雰囲気を浮かべた平助は目を泳がせ、喜市との視線に促されて自分から口を開いた。

「それは兄弟子に話を聞いただけで。私は何も。」

せきたてて口にするさまはいかにもわけありげだった。しまつたなあと後悔をしたところで既に遅く、喜市は花の重さにしなる肩をさらに下げる、とぼとぼと大門へと続く坂を上りはじめ「清次郎どのめ」と小さく呟いた。

今までで一番重い足取りで大門までたどり着くと、簡素な木組みだけの冠木門の周りは、昼見世前の振り売りや湯屋に行く前の化粧氣のない花魁を見物に来た客などで賑わい、夜の艶っぽさは微塵も感じられなかつた。

籠に入った花を掠めながら、白粉や香の混じつた匂いのする男がすれ違つていく。文句をの一つでも言おうと思ったが、客を見送る時刻を過ぎても居続けるあたりどうやら遊女の間夫（情夫）だらう。無粋な真似はしまいと思いつつ、喜市は苦い思い出を噛み締めた。

「喜の字じやねえか！」

門をくぐつた瞬間、威勢のいいだみ声が投げかけられる。つられて平助が振り向けば、声をかけた男は「ほう」と声をあげてしげしげと平助の顔を眺めた。

「久助どん」

平助の直ぐ前で喜市の素つ頓狂な声があがつたせいで、通り過ぎていく行商たちも思わず振り返る。その様子にがははと豪快に笑う、久助とよばれたその男は、年のころは三十ほどだらうか、浅黒く光る肌のその額に小さな傷跡をこさえ、がつしりとした体つきは、平助の兄弟子よりもよっぽど強そうに見えた。

「なんでえ、お前さんもう白粉の匂いはうんざりじゃなかつたのかよ」

久助の視線を辿つて、平助が喜市の顔にたどり着けば、気づいた喜市は気まずそうに頬を強張らせ口の端をきこちなくあげた。

「彦佐が足あつかったから、少しの間だけ代わつてやつてるだけだよ。久助どんこそ吉原なんか出て地女（遊女等ではない女性）と所帯持つんじやなかつたのかい。」

「そりやあ久助どんだつて言い寄る女の一人でもいりやあこんなと

「こにはいねえや。」

久助の後ろからもう一人、今度は喜市と同じくらいの年と思える男がひょっこりと顔を出して隣に腰掛けると、久助の肩に手を回して慰めるように一度叩いた。

「伊之助、おめえもまだいたのかよ」

今度は顔も声も明るくした喜市が、振り向いて平助の腕をつかむと、番屋の上がりかまちに腰掛ける一人のもとへと引き寄せた。よろけながらも一人の田の前へと出た平助はひょっこりと小さく頭を下げる。

「喜市、おめえがそっちの気もあつただなんて俺は知らなかつたぜ、なあ伊之助」

やけに腹に響く久助の声に答えて、伊之助はにやにやと薄い唇でキセルを咥えると、じろじろと平助を舐めるように見て、勢い良く煙を吐き出した。

「それにしちゃあ色気のかけらもねえけどなあ」

当てられた煙を顔を振つて避けながら、平助はあからさまに眉間に皺を寄せる。気づいた伊之助はそれを鼻で笑つてから自分の髪（後頭部）辺りを指差した。

「怒るない。お武家様に色気なんてあつてもしようがあるめえよ」伊之助が意地悪そうにそう口にするが、喜市は「あつ」と声をあげ、急いで平助が肩にかけたままの手ぬぐいをつかむと瞬く間に平助の頭にかぶせて裾を縛つた。

相変わらず伊之助はにやにやと口の端を上げていたが、上がりかまちに腰掛けたままで体後ろにそらせ、端に寄せてあつた文机の上で筆を走らせるが、平助に髪を手渡した。

「何処の結屋も今は見世に出払つてゐよ。その見世いつて源次つて髪結いに結つてもらいな。見世の抱えだけど目が見えねえつてんで、源次を巣廻にしてるそこのお職（トップの花魁）以外は使わねえか

ら暇なはずだぜ」

片手で駕籠を押えたまま、平助はその紙を読んだが、髪を結つてやつて欲しいとしか書いておらず、思わず自分の髪がそんなに乱れているのかと被せて貰つた手ぬぐいの中に手を入れて確かめてみた。しかし、昨日の朝きつちりと結つてもらつたばかりの髪はまだ綺麗に整つていて、念のためになでた月代もすべすべとしていた。

「髪は乱れちゃいねえよ、その逆だ平助。お前の髪が綺麗過ぎるんだよ。それじゃあまるでお武家さんだ」

喜市に言われて初めて、平助は3人の髪が少しふっくらと張り出している事に気がついた。

平助のそれは、武士らしいぴつたりとひつめた髪だったのだ。棒手振りには似合わない。

気づいてとっさに頭を押えたものだから、肩にかけていた天秤棒がぐらついて花籠から花が一輪落ちてしまった。

しかし平助は思いつめた顔で地面に目を落としたままその花には気づいていないようだつた。

「ああほら、売りもんを粗末にするんじゃねえや」

見かねたのか、ちいさく「よいしょ」と口にして大儀そうに花を持ち上げて籠に入れると、伊之助は壁にかけてあつた笠をそのひつ詰めた丁髷頭にかぶせてやつた。

「結いなおせねえってんなら、これ被つときな。」

キセルを咥えなおし、あごをほんの少しあくつて促すと、平助は僅かに頭を下げてその紐をしっかりと結んだ。

「悪いなあ伊之助、ありがたいや」

「昔のよしみで負けといてやるから安心しねえ」

懐に入れていた手を喜市に突きつけると、伊之助はその天に向かた掌をひらひらと上下に扇いでねだる。喜市が呆れて口をあんぐりと

させると、伊之助の後ろでは久助が笑いながら首を左右に振って、伊之助とは逆に向けた掌で同じように上下に扇ぐと、喜市たちにさつと行けと合図していた。

久助とばっちらりと田が合つた喜市は深く頷くと、つむたえる平助の手をそつと取り

「ありがとうよ伊之助どん！」

と言い放つて仲ノ町へと駆け出した。

伊之助の怒鳴る声と、久助の割れるように荒々しい笑い声が後ろから追いかけたが、二人はわき田も振らず、まだ閑散としている吉原の奥へと消えていった。

「向こうの人に」

吉原の真ん中を通る仲の町を真つ直ぐと進み、一番奥にある京町一丁目に入つて直ぐに、かんざしのかざりがしゃらしゃらと音を立てるようになにかすかな声が脇から聞こえた。

遠慮がちに響くその声の先では、田を見張るほど鮮やかな朱色の着物の上に、金糸が華やかに織り込まれた黒い帯を締めた小さな禿が手招きをしている。

平助よりも大分年若いその子は、右の袖の袂をきゅっと押さえ、白く細い手の先だけで香を聞く様にして招いた。幼さがなく妙に艶っぽさのにじむ仕草に平助は自然と足を止めていた。

「平助、お客だ。寄つてくぞ。」

呆けていたところを不意に肩を小突かれて、平助はつんのめりながらも喜市^{かみち}の後に着いて少女の元へ行く。そのおぼつかない足取りを見た禿^{かむろ}は、目を細め口の端を僅かに引き揚げると、手招きをしていた手を戻してそつと口許を隠した。穏やかなその動きに、平助の視線は奪われる。

「はいよ姉さん。何を差し上げようか。」

喜市がどさりと籠を置いた音にはじかれて、平助も慌てて籠を地面に下ろした。禿^{かむろ}はしばらく一組の籠の上に目を滑らせた後で眉を寄せ、不意に振り返つて妓楼の二階を見上げた。

「姉さん、都路姉さん。なんと申しんしたかのう。」

細い声が、高い空へ向かつて真つ直ぐと抜ける。少しおいてから二階の障子が音もなくひかれ、中から髪を下ろした化粧氣のない疲れた顔が覗いた。

「秋明菊^{あきめぎ}じゃ。」

後ろから髪結いが髪を引いているのが、不自然に何度も頭を後ろにそらせて、都路と呼ばれた遊女はそれでもぐいと窓から頭を出し、田を細めて籠の中身にぐるりと田をめぐらせると、その田を喜市で留めた。

「喜市どんー喜市どんじゃないかー」

都路はじけるようにぱあっと顔をほこらばせ、田をまあるくして輝かせる。

声をかけるのと同時に思い切り窓から乗り出したものだから、奥から髪結いが「姉さん！」と咎める声が聞こえた。

「覚えておいでじやないかい、ほら、ハツ橋姉さんの！」

首を傾げる喜市はその声で頭を引き起こし、手を叩いた。

「お前八重咲か！へえ、禿までつけて随分立派になつたじやねえか。

」
声を掛け合う二人の顔を、平助と禿が同じように交互に見る。

「立派じやねえよ。無心し通しで筆ばかり上手くならあ。とにかく今更どうしなんした。馴染みが懐かしくなりんしたか

髪結いが諦めたのか、都路は威勢良く答へながらも髪を下ろしたまま窓に腰掛けると、煙管を取り出す。後ろを通つた貸し本屋がそれを見てひゅううと口笛を鳴らした。

「やうじやねえよ。彦佐が怪我して動けねえのや。」

ふうふ、と喉の奥で答えると、都路は煙管を吹かした。

「で、そつちの若いのはどうしたんだい。たかが花売りが弟子なんかとつちまつて喜市どんのほうがよほど」立派じやねえか。」

喜市は平助をわき田に見て「すまないねえ、口の悪い女郎だらつ」とこつそりと呴いた。

「とにかく、稻本屋の今のお職は誰だい。今から行つてこいつの髪

を結つてもらわにやいけないんだ。」

言つて喜市が平助の笠をぱつととると、都路は「あれ」と間抜けた声を出してにやりと笑つた。目の前にいた禿も小首をかしげて平助の頭を眺めている。

「今のお職は小稻だよ。なんでもこないだ入つてきた禿かむるが随分と良い」面相らしくて一層声がかかつてゐるつて話さ。うちのよしのだつて負けちゃいないのにねえ」

ねえ、と上から声を掛けられて、よしのと呼ばれたその禿が袖口で顔を隠して首を横に振る様は、さつきとは打つて変わつてまだ初々しく、喜市も平助も思わず頬を緩めてしまつた。

八重咲に教えてもらつたとおりに稻本楼に行くと見世番が訝しげに二人を睨み付けた。

中見世の稻本楼の店構えは立派で、一端の町人風情が世話になることはまずない妓楼である。一階の窓をじいと見つめる平助の背中を叩き、喜市は見世の中へと促した。

が、途端に見世番が「おい」と低く響く声で呼び止める。

二人が振り返れば、身の丈が五尺六寸はありそながつしりとした見世番が立ち上がり、腕組みをしてこちらを睨みつけている。

思わずぎょっとして眼を見開いた平助とは対照的に、喜市は飄々と「源次に用があるんでい」と言うと気にせず足を進めた。平助は突然喜市に背中を押され、足がもつれかけた。

眉をひそめて喜市をみると、飄々とした表情の中で目だけは笑わずには、そして声を潜めて平助にこういった。

「平助、お前は振り返るんじゃねえよ」

「なぜ」

とつたに聞き返したが、喜市は返答せずに暖簾の奥へと平助を押し込んだ。

不意に訪れた客に、番台で大福帳を睨んでいた番頭が顔を上げ、顔をしかめて平助を見た後でその顔を喜市にぐるりと向ける。暫く首を傾げた後で漸く何かが腑に落ちたらしく、一気に顔を緩めて番台から出て向かってきた。

「喜市じやないか、どうしたんだい久方ぶりだねえ」

喜市より十は年が上かと思われる番頭は、喜市の肩をばしばしと叩いては嬉しそうに笑つた。一瞬口の端を引きつらせた喜市は、さつさと草履を脱いで手ぬぐいで軽く足を払つと平助を引き揚げ、その背に隠し「源次つて奴に会いに来たんだよ」と一言番頭に告げた。

空気がぴりりと張ったのが、番頭の顔が見えない平助にもわかつた。

番頭は再び首を傾げると、納得がいかない様子で後ろに隠れた平助を覗き込んだ。

おもむろに、喜市が平助の笠をぐつと下げる。

「おまえんとこには迷惑掛けねえよ。伊之助から案内されて、源次つて髪結いを借りてえんだ。ちつとこいつが見られねえような頭になつちまつてよ。他の髪結いが空いてねえのさ」

そう口早に告げる喜市の顔を番頭はじつと見つめ、顎を指で捻つて少し考えていたが、喜市が挙むような素振りを見せるとしぶしぶ顎をしゃくつて一階へ促した。

「お前さんがわけありつてことは察したるうが、間夫じやねえつて説明しなくていいだけましだつたよ。お前さんみたいな坊ちゃんがあの手のやつに顔を覚えられてもこじりあらくなことはねえさ。面倒なんだよ。特にここの番頭は一層面倒だ。面倒に輪をかけておせつかいだ。」

階段を上りながら、喜市は漸くいつものように口を開いた。

階段は揚がつた座敷の奥から、今入ってきた入口のほうへ向かつて上る妓楼特有の作りで、おかげで上がりかまちに腰掛けた番頭の上へとのぼっていたから、喜市の声は番頭目掛けてすっかりと筒抜けてしまい「誰が一層面倒だ花市が！」と真下からきせるで階段をつかれた。

二階に上ると、中郎（妓郎で掃除など雑用をする男）たちが規則的で小気味よい足音を響かせながらせわしなく廊下に雑巾を掛けた。独楽鼠のように駆け回るそれがまるで見えないかのように女達はあくびをこねながらゆつたりと歩き、または朋輩と立ち話にいそしんでいた。後ろからはおいかげっこをする禿たちがきやあきやあと声をあげながらかけてくる。

そんな中からちらちらと向けられる視線と笑い声に、平助は屋根の

下で笠を被つている自分のいでたちを恥じて、益々深く笠を沈めたが、そのせいで突然立ち止まつた喜市の中間にぶつかつた。

「あはつ、花市どん」

平助が顔を上げて喜市^{ヒヂ}に覗けば、中庭に面した格子に手をかけ、髪の僅かに乱れた女郎がしなだれるように立つていて。白粉が剥げた首が妙に生々しい女は、格子を伝つてこちらへと近づいた。

「久しいじやありんせんか花市どん。」

氣だるそうな体とは打つて変わつて弾んだ声をだした女は、にいつとわらつて襟元を直した。

「へえ、小芝じやねえか久しいな。どつだいあのどくたな三味線はましになつたかい。」

「どくたとは隨分じやないか」

さつきまでのしなだれた仕草はどくやら、小芝と呼ばれた女は頬を膨らませ、腰に手を当ててわざとらしく怒つて見せた。

「わつちは今じやあ明石つていう立派な座敷持ちさ。今も馴染みの居続けを見送つたばかりの売れつ妓なんだよ。三味なんざ今じやお手の物さ。あんまり上手で聞かせてやるのも勿体のつてたまりんせん。」

憎まれ口は明らかに楽しそうで、突きつけられた喜市^{ヒヂ}のほうもまんざらでもない様子でわらつて見せた。

「では明石様。お会いできて丁度良かつた。お前の小糸ねえさんの所に連れてつとくんな。隨分来てないんでわからなくなつちまつた。」

変わらずぞんざいな扱いの喜市に微笑んだ後で、明石はちらりと平助に目をやつしたことに気づいた喜市は、聞かれるよりも先に「弟子だよ」と短く答えた。途端に明石は「あはつ」と一つ大きな笑い声を上げた。響いた声で既にこちらなど気にしなくなつていた女郎たちの視線がまた集まつたのが、平助にはたまらなかつた。

「お弟子さん、喜市つて奴はねえ、あの大見世の玉屋で女郎といい

仲になつちまつてねえ」

「明石殿、こつちは急いでるんだよ。小稻はどうだい。やこにいる源次つて髪結いにあいてえんだよ」

自分の話を遮つて、少しいらだつたように喜市が声をあげたので、明石は目を丸くして拗ねたように口を尖らせた。

「今はわっちの小稻ねえさんじやありんせんよ。今的小稻は一代目さ。わっちの朋輩がなりんした。」

少し眉をひそめ寂しそうに目をそらすと、明石はわざとらしく大きなあぐいを打ち、再び氣だるそうに格子に寄りかかると

「やこの突き当りを右に行きなんし。牡丹の絵が描いている襖が小稻の部屋さ」

と、今度はその姿に似合つたぶつきら棒な物言いをして、独樂鼠を邪魔そうに避けながら行つてしまつた。

田に当たつてくたびれてしまつた花のよつな、艶やかでも痛々しいその後姿を平助は自然と目で追つていた。

「残念だな。朋輩に姉さんの名前取られちまつたのが悔しいのや。お侍さんで言う所の、やつとつの道場の跡を継ぐよつなもんだからな。姉さんの名前を貰うつてのはや。たあほら、行くぞ」

そう言つて直ぐ、喜市が離れる気配がして平助は慌てて追いかけた。

「なら、少しくらい優しくしてやつてもよからうに」

小走りに追いついて、平助は納得が行かぬと、眉間に皺を寄せて文句を言つた。去り際の明石の姿があまりに頼りなかつたことが不憫でたまらず、またそれを氣にも留めない喜市に僅かに苛立ちをおぼえていた。

周りで聞こえる楽しげな女たちの笑い声や囁きあいが、余計に明石と喜市のやり取りを引き立たせた。

「平助。お前がここにどんな夢を見たのかわからねえが、ここには情をかけちゃなんねえよ。ああする女ほどここは強いのさ。

背を向けたまま語る高市の言葉は平助の腑に落ちなかつたが、それでもその背中がさつさと遠のいてしまつので、言ひ返さうと思つた言葉を喉の奥にとどめて追いかけた。

「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3563n/>

吉原指南・

2011年10月5日23時43分発行